

自然との共生・共存の道を学ぶ

—マレー半島先住民と共に暮らした3年間の経験から—

講師 北村 豊 信州口腔外科インプラントセンター所長 (長野県上高井郡小布施町)
松本歯科大学顎顔面口腔外科 臨床教授
元青年海外協力隊隊員



はじめに

演者は、昭和52年2月からの3年間で、青年海外協力隊員として国立マレーシア先住民病院での活動に参加した。

半島マレーシアの先住民は、オラン・アスリと呼ばれ、現在約7万人が熱帯降雨林(ジャングル)を中心として生活しており、その人達の福祉・厚生を目的に設立されたのが先住民局である。その中でも重要な活動をしていたのが先住民病院であった。

この病院での3年間の活動の場は、病院内に留まらず、ジャングルの奥深くへの巡回診療も重要な任務であった。その活動を通して世界最古といわれる森で、正に自然と共生して生きる先住民の生活から学んだことは演者にとって極めて意義深く、その生活を自然環境の視点から述べたい。

いわゆる文明社会の歴史は高々しれたものである。しかし、それと比較すると先住民の生活は、永々と大昔より続いてきたものであり、多くの日本人の目には、原始的、野蛮、遅れている等と映ることが多い。しかし、その生き方は正に森の自然環境に調和したものである。

その生活の場である熱帯降雨林とは何

なのか? 自称文明国、とりわけ日本にとっては、籐やフタバガキ(通称ラワン)等の南洋材と呼ばれる木材を中心とした森林資源搾取の場であり、経済的に価値が高いだけの存在であったのではないだろうか。

マレー半島の先住民にとっては、森は自分達の生活を精神的にも物質的にも支えてくれる重要な場であり、衣食住を始めとして全ての生活に必要な糧はその森から生まれ、また自己を含めその森の土へと帰って行く。いうなれば、「森」は先住民にとって真の意味でのスーパーマーケットであり、完全なセルフサービス方式でもあり、そこでは当然のことながら切身の魚、さばかれた肉、そして土の着いていない野菜は扱われていない。

その豊かな森で全てを賄うことのできる先住民は、空こそ飛べないが、スーパーマンであると言え、演者は心から尊敬している。

豊かな森では、当然のことながら食糧は新鮮で生きたまま保存されており、したがって冷蔵庫は必要なく、農薬等の環境汚染物質とは無縁である。

それらの森の営みと調和したというよりも、その一員として生活をしている先住

民にとっては、バランスのとれた研ぎ澄まされた五感は重要であり、知恵と工夫が無いと生きていけない世界でもある。

科学を信仰することにより、いわゆる先進国の人々は、物質的には豊かになったことは事実である。しかし、物質文明を得る為に人間は自然等にとってマイナスとな

る消費税をどれだけ多く支払ってきたことであろうか。現代文明というスマートな衣装をまとった怪物に侵された自称先進国の人々は、今こそ自然との共生・共存のエキスパートである先住民から学ぶことは多いと考える。



サソリは大の遊び友達

体長15cmもあるこの大きなサソリも子供たちが幼いころからの遊び友達である。

日本のお父さん、お母さん、そして学校の先生が、このような子供の姿を見たら何と言うであろうか?

そうです! 「あぶないからやめなさい!」

日本では「禁止」がいたる所にあふれている。そのように禁止することが本当に子供の為になっているのであろうか……

先住民の子供達の本当の良き先生は、かけがえない自然である。大自然の中で生まれ、そして多くのことを学んで育っていく子供達、これこそ自然な姿といえるのではないだろうか?



フンドシ 外交大成功

(1980年)

先住民と早く親しくするには、診療の際にも白衣を着用したりせず、心を開いて外見も行動もなるべく彼らに近づけ、違和感を与えないようにするのが良い。

まさに「郷に入っては郷に従え」で、裸足もしくはサンダルで、ショートパンツ、またはフンドシー丁という格好が良い。フンドシ愛好家の多かった先住民の間では、私の母手作りのさらしのフンドシは注目の的で、初対面の彼らの中に溶け込むには十分なきっかけとなった。